

1 単元名 読んで考えたことを話し合おう「ごんぎつね」(全12時間)

2 単元目標

- ◎場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述をもとに想像して読むことができる。
- ◎文章を読んで考えたことを話し合い、互いの考えの共通点と相違点を考えながら話し合うとともに、一人一人の感じ方の違いに気づくことができる。

関心・意欲・態度	読むこと	話すこと・聞くこと	書くこと	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項
・叙述に着目して物語を読み、感じたことや考えたことを進んで話し合おうとしている。	・会話や心情表現、行動から人物の性格や気持ちを読み取っている。 ・情景を表す文や語句に着目して読んでいる。 ・人物の行動や性格、人物と出来事との関わりについて読み取り、感想をまとめている。 ・これまでに読んだ他の本を想起し、比べたり重ねたりして考えたことをまとめ、交流している。	・友達の発表を、自分の考えと関わらせながら聞き、発言している。	・目的に応じ、条件に沿って文章を書いている。 ・書いたものを発表し合い、自分の考えと友達の考えを比べている。	・言葉には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気づいている。

3 ひびき合う子どもたちをめざすための指導の工夫

- 中学年ブロックテーマ「追究する力、仲間と支え合う自分」
- ・自分の問題をとことん追究する姿 ・仲間と協働して追究する姿
- 研究課題「切実な問題意識を持ち、友達と関わり合いながら学習する子どもの育成」
- 手だて・・・子どもの「切実な問題」を見とった単元構想と授業づくり

(1) 単元と指導

①単元について

本単元の内容は学習指導要領「C読むこと」の②内容(1)のウ「場面の移り変わりや情景を、叙述をもとに想像しながら読むこと」、エ「読み取った内容について自分の考えをまとめ、一人ひとりの感じ方に違いがあることに気づくこと」、カ「書かれている内容の中心や場面の様子がよくわかるように声に出して読むこと」にあたる。

本作品は、「1」から「6」の場面で構成されている。「1」から「5」までは主人公「ごん」の視点で書かれており、「ごん」の心情やその変化がとらえやすい。また「6」では視点は兵十にうつり、兵十の心情とその変化をとらえやすくなっており、まさに、場面の展開に沿って人物の性格や心情の変化を想像しながら読む力を育てるのにふさわしい作品と言える。

本作品は、山奥で孤独にくらす小ぎつね「ごん」と、兵十との心のすれちがいを描いた物語である。身よりのないごんは、孤独感から素直になれず、村人に対していたずらを繰り返す。しかし村人はそんなごんの思いを知る由もない。ごんはその思いとは裏腹に、村人からは嫌われていく一方だった。そんな虚しい日々を送っていたごんだったが、兵十の母親の死をきっかけに、自らの行いを悔い改めることになる。物語冒頭では、ごんは無差別に村人にいたずらを繰り返していたが、それはやがて兵十一人に対するつぐないの行動へと変わる。そのつぐないを続けていくうち、ごんが兵十に対して抱いていた謝罪の思いは、やがて強い親しみへと変わっていく。

物語中盤、月のいい晩、兵十が仲間の加助と夜道を歩く場面がある。二人の会話が つぐないのことにになると、ごんは会話の内容が気になって離れられなくなる。この場面は、ごんのセリフこそ少ないものの、ごんが兵十に近づきたい、くりを持って行っているのは自分だということに気づいてほしいという、兵十に対する思いがよく分かる場面である。その思いは、二人の後をつけていたり、兵十のかげぼうしをふんでみたり、お経が終わるまでわざわざ二人を待っていたりといった、ごんの行動から読み取ることができる。ごんは兵十に、つぐないを繰り返してきたことに気づいてほしいが素直に言い出せない。ここでは、それでも兵十が振り向いてくれたらと、万に一つの望みに胸を焦がすひたむきな小ぎつねの、心をしめつけるようないじらしさが浮き彫りになる。この場面は、教科書の挿絵と巧みな情景描写もあいまって、儂くも美しい大変印象的な場面である。しかし、その後の兵十と加助の会話では、くりをくれるのは神様だという結論になる。兵十は、くりをくれるのがごんだとは夢にも思っていないという非情な現実を、ごんは突きつけられるのである。この展開は、最後のすれちがいを暗示しているところとすることができる。

物語の最後はごんの思いも虚しく、ごんは兵十の放った銃弾に倒れることとなる。うちの中に入っていくごんを見て、兵十はごんを殺そうとする思いを固める。なぜなら兵十にとって、この時点でのごんは自分や村に損害をもたらす害獣でしかなかったからである。兵十はためらわずにごんを撃った。ごんが倒れたその後、何かいたずらされていないかを確認すべく辺りを見回した時、ようやく兵十はごんが固めて置いたくりの存在に気が付く。「おまいだったのか」と兵十が尋ねると、ごんは目をつぶったまま静かにうなずく。これまで送り主不明だったくりと、いたずらぎつねとしか思っていなかったごんが、初めて一本の線につながった瞬間である。脱力する兵十は、持っていた火縄銃を取り落とす。取り返しのつかないことをしてしまったと途方にくれる兵十の思いは、火縄銃から立ち上っていく青い煙とともに、消えることなくいつまでも残っている。

ごんの思いは兵十に届いたが、しかしそれは兵十がごんを撃ってしまった後だった。このすれちがいがこそ、物語の核となる部分であると考えられる。物語中盤においては、彼岸花が、赤いきれのようにさき続けているという描写がある。しかしその直後、葬儀への参列者が墓地に入っていく過程で、それらの彼岸花は踏みおられてしまう。この叙述を、物語の終末の展開を暗示していると考えれば、この作品の主題を「ひたむきな自然の持

つ儚さや美しさと、それを無慈悲に破壊してしまう人間」という風にとらえることもできる。

この物語においては、ごんと兵十それぞれの気持ちや考えが分かる叙述を探すと、多くの箇所を見つけることができる。美しい情景描写は、味わい深い挿絵とあいまって、児童の感受性に強く訴えかけるだろう。叙述をもとにその情景を十分にイメージし、想像豊かに読み味わうことができる単元としたい。

②子どもの見とりと学習過程について

本単元の学習を進めるにあたって、まずはごんの境遇について、クラスの子どもたち全員が正しく理解しておく必要がある。ここでは叙述に合った森の写真を提示して、ごんの置かれた環境を、全員が同様にイメージできるようにする。そうすることで、ごんがいたずらを繰り返した背景には、「すごくさみしかったから」「誰かにかまってほしかったんだと思う」という、ごんの切なる願いがあったことを理解することができる。ここでは「なぜごんは嫌われるようないたずらをしていたのか」という課題に対する答えを、一人ひとりが考え、ノートに書く時間を十分に確保する。

しかしそのごんの行為も長くは続かない。ごんのいたずらは、兵十の母親の死を機に、つぐないという善意に満ちた行動に変化する。ごんの意識の変化については、子どもたちは、「ごんは自分の行動を反省したんだろう」と容易に考えることができるだろう。行動の変化については、こちらから「ごんは意識が変わって、行動はどう変化したのかな」と投げかけることで、自然と子どもの意識はごんのつぐないに向いていく。ここでは、子どもたちはごんの思いが読み取れる箇所を選び、その思いを想像していく。ごんの思いを読み取り、話し合っていく過程で、子どもたちは「兵十に対するごんの気持ちが、変わってきている」ということに気づいていこう。そして変化していったごんの気持ちだが、話し合う過程で、子どもの口から「でも兵十は気づいてなかったよ」「つぐないをしたのに兵十にはうたれたんだよね」と考えるだろう。ごんの思いが兵十に届いていたのか、届いていなかったのかは、そのことが分かる叙述を本文中から探し出し、兵十の気持ちを想像するしかない。このごんの心情、兵十の心情をそれぞれ想像し、考えたことを話し合う時間に向けては、一人ひとりがその考えをノートに書き込む時間を十分に確保する。また、その考えを話し合う活動においては、読み取った登場人物の心情が移り変わっていく様子に気づけるよう、その考えとその根拠となる叙述を時系列順に掲示していく。

また、それまでの学習活動において考えてきたこと、話し合ってきたことをまとめる活動として、単元最後の活動に、「一番心に残ったことを紹介する文を書く」活動を設定している。

③「切実な問題」について

本単元においては、本文を読んでまず自分の考えを持ち、その後話し合う活動を二回設定している。そのどちらも、本文の叙述にもとづき、ごんと兵十の気持ちを想像し、想像したことを話し合う活動である。同じ叙述に目をつけても、子ども次第でその読み取り方や解釈の仕方は異なるものと考えられる。さらに、自分一人で読み取ったことが、作品の全てではない。時間をかけて読み取ったとしても、それはあくまで一つの読み方でしかない。一人ひとりの読みが違い、その一つひとつの読みにも価値がある。子どもが「ごんはきらわれていたと思う」という意見を出したら、その逆となる子どもの意見を提示する。自分の考えと異なる意見が表れれば、少なからず「確かに」「なるほど」と思える箇所もあるだろう。自分と異なる観点から改めて叙述に目をやれば、作品の新たな一面、意外な一面に気づくことができる。こういった授業展開を行うことで、「ごんぎつね」という作品全編に及んで綴られている、ごんと兵十の心情の移り変わりを読み取る面白さに気づかせたい。さらにその心情を深く読み味わうためには、友達の考えもよく聞きたいと思うことが、子どもにとっての切実な問題である。「ごんの思いは兵十に届いたのか」について考える話し合いにおいて、その活動に先立って、子どもたちは個人で本文を読み、叙述から兵十の思いを想像する。「ごんぎつね」という作品を深く読み味わうためにも、子ども自身が切実感を持って「聞きたい」と思える話し合いの場にしていきたい。

④追究する力、仲間と支え合う自分

「ごんの思いは兵十に届いたのか」という問いに対して、子どもたちは叙述に基づき、様々な答えにたどり着くと考える。兵十のごんに対する思いが読み取れる叙述を、児童が一人で全て見つけることは容易ではない。一人ひとりがよく本文を読み、そこから叙述に基づいて兵十の思いを読み取ることで、まずは児童が自分の考えをしっかりと持つことが、個人での追究にあたる。着目した一文だけでなく、さらに物語全体に目を向け、複数の叙述から、登場人物の心情が移り変わっていくことに気づかせたい。その後クラス全体で話し合う中で、一人では気づけなかった叙述や、あるいは自分とは異なる読み取りに触れながら読みを深めていくことが、クラス全体での追究となる。その話し合いの後、学習を通して最も心に残ったところを紹介する文を書く活動を設定している。その紹介文を書く際には、自分の考えが、誰の考えの影響によるものなのかを考える時間を設定することで、クラスの仲間同士が支え合っているのだということを実感する時間としたい。

⑤ひびき合いについて

友達の読みや考えを聞いて納得したり、共感できたりしたものについては自分の考えとして取り入れたり、あるいは元々自分が持っていた思いが、より深まったり、より確かになったりすることがひびき合いにつながると考えている。前述のように、年度当初と比べると、本学級の子どもは課題に対する自分の考えを持つことができるようになってきた。ごんの思いが兵十に届いたかどうかについて話し合う場では、自分の考えを述べて終わりとするのではなく、自分と異なる考えにこそよく耳を傾けるよう指導する。また、個人での読み取りの段階では、一部の叙述を読んで、「その時点では届いていなかった」「その時点では届いている」と考えるに留まると予想される。話し合いの時間にはそういった個の読み取りを出し合い、クラス全員の読みを、クラスの全員で共有する。そうすることで、自分だけでは気づけなかった読み方や考え方にふれ、一人ひとりの読みがより深まったり、確かになったり、別の考えが変わったりしたとき、それをひびき合いとしたい。

4 単元指導計画（全12時間）

	学習活動	主な支援・留意点 ◇【評価】
①	本文を読み、初発の感想を持つ ・ごんがうたれてかわいそう ・ごんは死んでしまったのかな ・ごんをうった兵十はひどい	・物語の基本的な情報（登場人物・時代・大まかな生活の様子）についておさえておく。 ◇【関】【書】物語を読んで思ったり感じたりしたことを、表現している。（発言・ノート）
② ③	ごんは、兵十にきらわれていたのか ・ごんはきらわれるほどのことをしてたかな？ ・うなぎをとられたからきらいになったと思う ・いたずらされてたし、きらいだったと思う ・たくさんいたずらをしてきたし、きらわれても仕方ないと思う	・考えの根拠となる部分の叙述に線を引くよう伝える。 ◇【関】読み取った内容を進んで伝えようとしている（発言・ノート） ◇【話】友達の発表を、自分の考えと関わらせながら聞き、発言している。（発言） ◇【読】登場人物の心情を、叙述から想像して読んでいる（発言・ノート）
④	なぜごんは嫌われるようないたずらをしていたのか ・おもしろかったから ・楽しかったから ・ひまだったから ・さみしかったから ・かまってほしかったから	・ごんが過ごしていた環境が分かるよう、叙述に合った写真を提示し、いたずらに走ったごんの心情を想像しやすくする。 ◇【関】読み取った内容を進んで伝えようとしている。（発言・ノート） ◇【読】登場人物の心情を、叙述から想像して読んでいる。（発言・ノート）
⑤ ⑦	ごんは、どんなつぐないをしたのだろう ・いわしを持って行った ・くりを持って行った ・だんだんつぐないが丁寧になっていった	・ごんが何回つぐないをしたのかを明確にすることで、ごんの気持ちの移り変わりを考えやすくする ◇【読】登場人物の心情を、叙述から想像して読んでいる。（発言・ノート） ◇【関】読み取った内容を進んで伝えようとしている。（発言・ノート）
⑧ ⑩	ごんの思いは兵十に届いたのか ・届いてない くりの送り主は神様だと思ってるから ・届いた ごんは兵十の質問にうなずいて答えたから ・届いた 兵十が真実を知って、ひなわじゅうを落としたから ・届いてない くりを見ただけでは分らないと思う ・届いてない うなずいたけど、全ては分らないと思う	・一人ひとりの読み取りとその根拠になる叙述を時系列順に揭示し、兵十の気持ちの移り変わりを考えやすくする。 ◇【読】登場人物の心情を、叙述から想像して読んでいる。（発言・ノート） ◇【関】読み取ったことを、進んで伝えようとしている（発言） ◇【話】友達の発表を、自分の考えと関わらせながら聞き、発言している。（発言）
⑫	この物語を読んで、一番心に残ったことを書こう ・ごんの思いが兵十に届いてよかった ・ごんをうった兵十もつらい思いをすとおもう ・ごんの思いは届いたけど、うたれてしまったのはやっぱりかわいそうだと思う	・学習の記録を提示し、これまでに考えてきたことを思い出しやすくする。 ◇【書】学習を通して考えたことを書いている（ノート）

- ◎場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述をもとに想像して読むことができる。
- ◎文章を読んで考えたことを話し合い、互いの考えの共通点と相違点を考えながら話し合うとともに、一人一人の感じ方の違いに気づくことができる。

主題 『ごんの心(近づきたい)と兵十の心(憎しみ)の悲劇的なすれちがい』

本文を読む。(初発の感想) ①

「こないだ、うなぎをぬすみやがったあのごんぎつねめが、またいたずらをしに来たな」という一文が足された理由??

このセリフから読み取れる兵十の思い…「ごんが嫌い」「ごんを憎む気持ち」(「～やがった」「ごんぎつねめが」)

ごんは嫌われてた? 別にそうでもない?

ごんは、兵十にきらわれていたのか②

- ・めいわくなことをしているから、多分きらわれていた。 ・生活に関わるようなこともしてるから、すぐきらわれてたと思う。
- ・みんないたずらの被害者だから、村人からきらわれてたんじゃないかな? ・これだけいたずらをしてたら、
- ・何度もいろいろいたずらをしてきたから、きらわれてたと思うよ

気持ちの変化を追うため、物語冒頭部分でのごんがいたずらをしている理由(ごんの境遇)について考える。その後も登場人物の気持ちの変化について考えながら読むよう指導する

なぜごんは嫌われるようないたずらをしていたのか①

- ・たいくつだった ・おもしろ半分 ・ひとりぼっちでさみしかった ・友達がほしかった

ごんの気持ちは変化していく(いたずら→つぐない)

ごん	さみしい。誰かかまってほしい
----	----------------

ごんは、どんなつぐないをしたのだろうか③

- 「辺りの村へ出てきて、いたずらばかりしました」・・・ 誰かにかまってほしい 誰か友達がほしい
- 「ちよいと、いたずらがしたくなったのです」・・・ 軽い気持ち からかう
- 「のび上がって見ました」・・・ 兵十の様子に気がなる
- 「ちよつ、あんないたずらをしなけりゃよかった」・・・ 後悔 反省
- 「もと来た方へかけだしました」・・・ いわしを早く届けたい
- 「とちゅうの坂の上でふり返ってみますと」・・・ 兵十が気になる
- 「うなぎのつぐないに、まず一ついいことを～」・・・ これからつぐないをするつもり
- 「入口にくりを置いて帰りました」・・・ 最初よりいねい
- 「松たけも二、三本、持っていきました」・・・ つぐないの気持ちが強くなる
- 「ごんは、二人の後をつけていきました」・・・ 兵十と加助の会話が気になる
- 「いどのそばに～」 「お念仏がすむまで」
- 「二人の話の間を聞いて、ついていきました」・・・ 二人の会話の続きが気になる
- 「兵十のかけぼうしをふみふみ行きました」・・・ 兵十に近づきたい気持ちが出る
- 「おれは引き合わないなあ」・・・ 不満 つぐないに気づいてほしい
- 「土間にくりが固めて置いてある」・・・ 家の中まで入ってる
- 「ぐったりと目をつぶったまま、うなぎきました」・・・ くりとごんが結びついてうれしい

次第に強くなっていくごんの気持ち

ごん	すごく兵十と仲良くなりたい
----	---------------

ごんの思いは兵十に届いたのか④ (4/4 本時)

- ・「うん」・・・ 届いてない兵十は神様がくりをくれたんだと思っているから。
- ・「うなぎをぬすみやがったあのごんぎつねめが～」・・・ 届いてない兵十はまだ怒っているし、ごんの気持ちには気づいてないと思う。
- ・「ようし」・・・ 届いてない「ごんをうってやろう」という気持ちが強いから。
- ・「うちの中を見ると」・・・ 届いてないこの時はまだごんがいたずらしたと思っているから、いたずらされてないか確認したと思う。
- ・「土間にくりが固めて置いてあるのを～」・・・ 届きそう固めて置いてあったくりを見ておどろいているから、そのときにごんの気持ちに気づいて、ごんに目を落としたんだと思う。
- ・「兵十はびっくりして～」・・・ 届いたごんが来たあとにくりを見たから、もうごんの気持ちに気づいてると思う。
- ・「ごん、おまいだったのか、いつもくりを～」・・・ 届きそう「もしかして?」と思ったことを、ごんに聞いて確かめようとしているから。
- ・「ごんは、ぐったりと目をつぶったまま～」・・・ 届いてないくりを見ただけではまだ何も分からないと思う。
- ・「兵十は、ひなわじゅうをはたりと～」・・・ 届いた兵十の問いに答えたから、このときにごんの思いは兵十に届いた。
- ・「兵十は、ひなわじゅうをはたりと～」・・・ 届いた兵十が銃を取り落としたのは、ごんのつぐないの気持ちが分かったのにごんをうってしまい、取り返しのつかないことをしたと後悔したからだと思う。
- ・「兵十は、ひなわじゅうをはたりと～」・・・ 届いてないごんはうなぎをくれた、ごんの気持ち全ては伝わってないと思う。

兵十はごんがきらいで、しかもくりをくれたのは神様だと誤解してしまいうため、ごんの気持ちにはなかなか気付かない。兵十がごんの思いによりやく気付いたのは、兵十の問いかけに対してごんがうなずいたその瞬間だったが、それはもう兵十がごんをうってしまった後だった。

- ・兵十がごんを撃ったのは、しょうがないと思う
- ・兵十が、ごんの思いにもっと早く気付いたらよかったのに
- ・ごんは自業自得
- ・ごんは撃たれてしまったけど、兵十が、ごんの気持ちに少しでも気づけて良かった
- ・ごんはもっと早く気づいてほしかったと思う
- ・せっかく思いが届いたのに、死んでしまうのはかわいそう
- ・気づいてもらえてごんは嬉しかったんじゃない?
- ・ごんは、兵十にお礼を言ってほしかったんじゃないかな
- ・兵十もごんを撃ってしまった、すごくつらいと思う

この物語を読んで、一番心にのこったところを紹介する文を書こう①

6. 本時案（別紙）

7 実践を終えて

①単元の流れについて

導入の時間、ごんぎつねの作者「新見南吉」に加えて、南吉の書いた原文を編集した「鈴木三重吉」を子どもに紹介した。本文にある「いたずらぎつねめが、またいたずらをしにきたな」という文が、後からわざわざ付け加えられたものであるということの説明するためである。それを聞いた子どもたちは教師の予想通り、「何でこの文を付け加えたの?」と、疑問に感じていた。この一文は、兵十のごんに対する憎しみや怒りの気持ちを強調する文である。前後の文脈を読んでそのことに気付いた子どもたちからは、「ごんは兵十にきらわれていたの?」「なぜ兵十はそんなにごんがきらいだったの?」と、新たな疑問を抱いた。本単元の学習はここから始まった。

その後の学習は、「ごんが嫌われていた理由」「兵十に対するごんの気持ちの変化」「ごんに対する兵十の気持ちの変化」の読み取りへとつづいていった。これらの学習課題は、全て子どもの口から出て来たものである。一つ前の課題について一人一人が読みを深め、それを全体で話し合った結果、また新たな疑問が生まれる。それを繰り返したことで、「ごんぎつね」という作品を子どもたちの思考の流れに沿って自然な形で読み深めることができた。

本時の学習課題「ごんの気持ちは、兵十にとどいていたのか」については、特に本文の叙述を注意深く読む必要があった。一つ前の課題「兵十に対するごんの気持ちは、どう変化していったのか」を考えたときにも本文の読み込みは欠かせなかった。本時の学習課題解決も同様であるが、学習課題の中心になる兵十の心情が直接的に表現されている叙述が少ないため、一人で想像するには限りがあった。そのため、クラスの子どもたち一人一人の読みを、全体で話し合う必然性が生まれた。

子どもたちの疑問や考えについては、授業が終わる度にその時間の内容を記録し、模造紙に書き直して教室内に掲示した。そうしたことで、授業が進んだ後も、単元の冒頭の授業内容や、それまでの登場人物の心情の移り変わりを振り返ることが容易にできるようになった。

また振り返った時に既習内容を思い出しやすくする掲示物のレイアウトを考えることは、次時の見やすい板書の仕方を考える上でも有効であった。

②ひびき合いについて

兵十に対するごんの気持ちは「最終的には届いた」と、ほとんど全ての子どもたちが考えていた。しかし兵十の中でごんくりやまつたけがつながったのは、くりを抱えてきたごんを撃ったその後、「ごん、おまいだったのか、いつもくりをくれたのは」の問いかけに対してごんがうなずいた瞬間である。それまでは兵十がごんの気持ちに気づくことはできない。しかし子どもたちのノートには、「兵十にくりやまつたけをわたせたから、ごんの気持ちは伝わったと思う」「もらったものをありがたいと思っている兵十のせりふがあるから、少し届いていると思う」といった考えも多くあった。兵十の中でくりとごんがつながる前から、ごんの気持ちが兵十に届いていると考えていた子が少なからずいたのである。

しかし全体で話し合いの時間には、「ごんがくりを持ってきていることに気づいたのは火縄銃で撃った後だから、それより前にごんの気持ちが全て届くことはないと思う」と考え発言した児童がいた。その考えを聞いた他の子どもたちは、授業最後の振り返りの時間に自分のノートを見直し、そこにある自分の読みを考え直していた。また振り返りの時間に書いた感想には、「友達の考えを聞いて、自分の考えが変わった」「友達と同じ考えだったけど、話し合いをしてるうちにごんの気持ちが全部兵十に届いたかどうかは分からないと思った」といったことが書かれていた。複数の子どもたちがそういった感想を持つことができたのは、やはり本時の課題設定が、ひびき合いを促すものになっていたからだと考える。

③課題が子どもに対して切実であったか

上記のとおり話し合いを通して、授業後多くの子どもたちの考えに何らかの変化はあったが、その話し合いの時間は教師が設定したものだった。子どもが「もっと深く考えたい」「友達の考えも参考にしないと、兵十の気持ちは分からない」と考えて、話し合いの時間を望んだわけではない。

本文を読んで兵十の気持ちを考える際、「兵十の気持ちが書かれているところは少なくて難しい」と口にした子は非常に多かったが、しかしその少ない叙述からの自分だけの読み取りに満足してしまっているようだった。やはり子ども達自身の口から「話し合いの時間を作って、友達の考えも聞いて考えたい」と言った言葉が出てこなかった以上、本時の課題は子どもにとって切実感があるものだったとは言えないと考える。

③成果と課題

成果

- ・子どもの疑問や思考の流れに沿った学習課題を設定することができた。
- ・一人の読みで完結するのではなく、子どもどうしが話し合う必然性のある学習課題の設定ができた。
- ・既習内容を振り返ることのできる掲示物の在り方について考えることができた。

課題

- ・本時の学習課題は「ごんの気持ちは、兵十にとどいていたのか」であったが、実際には「くりやまつたけを持って行っているのがごんであるということ、兵十は気付いていたのか」と課題を履き違えて考えている児童が多数いた。そのため、子ども同士の話し合いの内容にズレが生じてしまった。そのズレは、本時の課題について考え始める前に、「兵十に対するごんの気持ちとはどんなものか」ということについて、学級全体で確認することができていなかったためだと考える。「ごんが、兵十に対してどのような思いを持つようになったのか」といったことは先の学習活動で考えていたため、その時間の内容を振り返る必要があった。また、本時の話し合いに入る前に、「課題と自分の書いた考えにズレがないかを、子ども自身が考え直すような時間を設定するべきだった。